

# 思考伝播の精神病理学的研究

昭和34年6月13日受付

信州大学医学部神経科(主任:西丸教授)

長野県立駒ヶ根病院(主任:中村院長)

竹内光子

## Ein Psychopathologisches Studium der Gedankenausbreitung

Mituko Takeuchi

Die Nervenlinik der Universität Shinshu (Direktor: Prof. S. Nishimaru)

Die Provinziale Nervenheilstalt Komagane (Direktor: Dr. N. Nakamura)

### 1. 緒言

自分が告げないのに他人が自分の考えを知っている、自分の考えが他人に通じてしまうという訴えは、分裂病の患者がよく示す症状であり、またこれは分裂病特有の症状であるとされる。このような症状は古くから知られていて、Wernicke や Kraepelin の精神医学書にも載っているが、それより以前から心霊術の神秘的な現象としても知られていた。思考伝播という名称に当るものは、Gruhle の思考転移 Gedankenübertragung や Schneider の思考伝播 Gedankenausbreitung、あるいは自分の考えを人に知られると思う Janet の思考察知 devinement などがあるが、これらの外国語は術語というより、患者が訴える言葉をそのまま術語の如く取扱つたもので、思考化声 Gedanken laut werden などと同じようなものである。我々が日常出会う患者でも、我国なら、患者は自分の考えを「とうにご存じでしょうに」というし、ドイツ語なら Man weiss schon, was ich denke とよくいうのである (Schulhof)。

ところで自分の考えが人に分つてしまうということは、一つの根本的な体験なのであろうか。投射 projection という言葉は、精神分析における一つの防衛機構の名称としては、思考伝播に名づけられた名称ではないが、投射という言葉に最も相当するように、思考が自己から他人に伝わるのが、ありありと体験されるものであろうか。思考伝播という一次的な根源的な体験があるのか。それとも思考伝播は他の根源的な体験、幻覚や妄想からの二次的なもの、一種の説明妄想なのであろうか。こういう点について考察するために、一見思考伝播とみえる約50例の患者を集めて、現象学的にその体験をしらべてみた。

思考伝播は、正常には自己の所有以外ではありえない自己の思考が他人に伝わるというのであるから、思考所有権の剝奪ともいえるが、他人から奮われるのと

はちがう。他人から奮われるならば思考奪取 Gedankenentzug である。これと思考伝播とは異なるが、しかし互に非常に類似した現象ともみられる。思考作為 Gedankenmachen, 思考被影響 Gedankenbeeinflussen と共に、自我に所属すべき思考が自我の所属を離れるという意味で、Gruhle の自我麻痺 Ichlähmung と大きく総括されるが、これを広く解すれば幻覚や独語までこれに入れられる。しかしこのような総括的な術語を用いることは、一方では大きな特徴をつかめるようにもみえるが、他方では微妙な差異をぼかしてしまいにしてしまう恐れもある。

### 2. 症例

#### I) 作為体験と共にあるもの

症例 1. ものを考えようとすると、急に頭が束縛されて考えが浮かんでこなくなる。手紙で書こうとしても言葉が浮かばなくなる。新聞なども読めなくされる。私のことは誰かに見すかさず、操られている。

症例 2. 私が何か考えるとすぐに人に分つてしまう。何か取ろうとすると、すぐにスーつと手が出る。誰かが出してくれる。自分がしやべるのも向うで手伝つてくれる。

症例 3. 私がどこかへ行こうとすると、どこへ行くのか見当をつけられ、誰かに反対の方へ行かされる。自分が考えようとしてもしないことを考えさせてくる。こちらの心が誰かにつかまれ、支配される。

作為体験では、自己の随意によつてしか行えないことが、他から左右され、影響を受けるのであるが、ある患者は同時に自分の心が相手に分つてしまつていて、それに対してそれに相応することをさせられると感ずる。この場合、自分の心が察知されるからそれに対して作為されるのか、作為されるので心の中が察知されたかと思うのかということの区別は多くの場合にはできない。作為と同時に察知が体験されている。

#### II) 幻覚と同時にあるもの

症例 4. 子供のころ近所の男の子に性的ないたづらをされた。高校に入つて性的な知識を持つてから、そのことで誰にもいえずに悩んだ。最近この秘密が村中に知れた。家にいると家のまわりから、村中の人がいれかわりたちかわり、そのことをあばく声を送ってくる。処女でないとか、パンパンになれと騒がれる。

症例 5. 近所の人が家のまわりに来て私の家の中を覗き、かくしごとを皆にいふらすので迷惑する。家の裏からも、表からも近所の人で、私が夜床に入ろうとして寝巻をきかえると、あんなぼろぼろの着物をきたという。主人との夫婦関係のことも、ちつともやらねえなどといわれる。メンスで便所に入ると、メンスだという。金や債券をいじつていると、20万円の債券だといふらす。家の中のかくしごとがすつかり外に分つてしまう。しかしこちらの心の中で思つたことは外に通じない。

以上二例は自分の秘密が外に通じてしまいそれに対して言ってくる幻聴があるものである。

症例 6. まわりに誰もいないのに、自分のしていること、考えることが人に分つてしまう。仕事によそみをする、どこをみている。早く仕事しないかと聞えてくる。本を読んでいると、それは棒読みだと聞える。赤い土は酸性土壌だと考えると、声は、あいつは農林学校でなかなか成績がよかつたという。唯物論の本を読むと、資本主義だという。両方読んでおく必要があると思うと、それもそうだと返事してくる。誰かが私の才能を知ろうとして探つているとしか思えない。

これは自分の行為や考えを批判する声が開える場合であるが、このような場合には自分のことがむこうに分つてしまうというのは、幻聴の内容への説明妄想であるのかもしれない。

症例 7. 放射能のせい、私が心の中で無言で考えたことが遠くの人に通じて、話をやりとりできる。こちらの考えを、いいとか、悪いとかいつてくる。考えが日本中、世界中に通ずる。

これは会話の形の幻聴であるが、この場合にも自分の考えたことは相手に通ずると患者は述べる。

症例 8. 自分がいつも尊敬しているK先生に自分の考えがそのまま通じてしまう。こちらの心の中つぶやきをK先生が声をはりあげていつてくる。自分がばかだと思うと、ばかだといつてくる。

症例 9. 腹の中で思つたことがすぐ他人に知れてしまう。腹の中で何か思うと、天空から、会社の同僚の声で、そつくりこだまして返つてくる。本や新聞を読んでも、天空から反響してくる。天空の声はまた自

分の欠点をあげたり、命令したりするので、怒つてばかやろうと思うと、ばかやろうと天空から聞えてくる。

これは思考化声やそれと同時に批判の声が開えるものにおける思考察知のあるものである。

症例 10. 自分の心に思ふことが、かげの人に分つて、向うから先にいいあててくる。本を読んでいるも、その内容を外の方で先に読んでしまうので、頭がこんがらかつて読めない。

これは思考化声の中の思考の先読みで、同時に自分の思考が先に通じたと訴えている。

症例 11. 考えが浮かぶと、ひとりでにのどから声になり、そのつぶやきがどンドンと流れるように外に出てしまう。それで隣家や、もつと遠くの村の人に聞え、向うでまねしていつてくる。

これは運動性言語幻覚のある有声考慮で、同時に思考伝播がある。

症例 12. 自分の考えが盗まれる。心の中で何か考えていると、それをばかにするような声が外から聞えた。ああ、これはどこかに通じているな、盗まれたなと思つた。

これは考えを批評する幻聴と被察知感と思考奪取が同時にあるものである。

症例 13. 自分の考えは、言葉にする前に何かに抜きとられて向うに分つてしまう。自分が喋ろうとするより先に、誰か外から先に喋つてくる。

思考奪取や思考先取の幻聴と被察知感との結びついたものである。

症例 14. 自分の心の中が人に盗まれ、知られてしまう。自分が家で本を読むと、となりの息子がそれを盗み聞きして一緒に読んでくる。

思考奪取と共よみの幻聴と被察知感の結合したものである。

症例 15. 何か心にふと思ひかけたこと、文字に書きかけたことが、他人に盗み聞きされ、外からいつてくる。わいせつな言葉がふと心に浮かんだり、自室で試験問題を書きはじめたりすると、もう向うに通じて復唱される。自分が何か心に思つたり、書いたりする時、自分では喋るつもりはないが、ひとりでに口の中につぶやきが出て、その時の僅かな息の変化が向うに盗み聞きされる。非常に感度の高い録音装置がしかけてあるらしい。自分で思うまいとしても、わいせつなつぶやきが口に出て、すぐ向うからいわれるので、たえず意識的に口を動かして予防していなければならない。

運動性言語幻覚と有声考慮と思考奪取と結びついた

被察知感である。

症例 16. 頭の中に浮かんだことが外に映るので、皆に分つてしまう。部屋の中に一人でいる時、死んだ祖父のこと、過去のいろいろの場面を思い浮かべると、ガラス窓の外に祖父の面影や、いろいろの過去の場面が、スーッと電気仕掛のように映るので、すつかり他人にみえてしまう。何かよい思いつきが浮かんできても、人に知れてぐあいがわる。

いこれは有形考慮があつて、それが他人にもみえるということと共にその考慮が他人に知れてしまうものである。

症例 17. 頭の神経がきりきりとしめつけられるように波うつてくると、頭の中が人に分つてしまう。その時頭の中で考えることはまるでテレビのように隣家に映る。隣家の人がそれをみて笑つたり、いろいろな声も聞える。

これは有形考慮と幻聴と共にある思考察知である。

症例 18. 考えが人に分つてしまう。何か自分が考えたり、みたりすると、それが眼の前の空間に黒い墨の字でみえ、それを読む声が聞える。心の中にばかと思つとばかという文字がみえ、誰か知らない人の声で読みあげる。

これは有形考慮と結びついた幻聴に更に思考察知が加わつている。

症例 19. 自分のことは、何を考えても、何をしても村中に分る。サイレンの音や子供の泣き声が私の耳に入ると、村中の人が、聞えてうるさいぞという声を送つてくる。自転車に乗つていて、自転車に乗つていて姿が幻のようにみえるといつてくる。

これは心の内容が聞えたり見えたりすることを知らせる幻聴で、やはり心の内容が相手に通ずると訴える。

症例 20. 自分が心に思つた人と自由に心が通じ、会話が出来る。自分が思わない人とは通じないが、自分がある人を思い浮かべると、頭がスーツとして、自分の顔がその人の顔になる。鏡をみなくても感じて分る。すると心もその人の心になつて、その人の声が頭とか腹に聞え、自分の心がゆるんでいると、しつかりしると励ましてくる。東京の人でも、死んだ人でも、自分が思い浮かべれば心が通じ、返事してくる。

道で会つた人の心がこちらに分る。向うの人の心が震動のようにこちらの心に響いて伝わり、こちらの心も向うに分る。

思考察知と共に察知者が自己に入りこみ、同一になつてしまい、また同時に幻聴もあり、逆に他人の心を察知することも出来る。

症例 21. 自分の思つたことが神様に通じ、いろいろと沙汰がある。声で沙汰してくる。悪いことを考えると叱りつけてくる。

症例 22. 下腹部に蛇が入りこみ、こちらの思うことがその蛇にすつかり通じる。こちらの考えをまねして喋つたり、考えに返答したりする。

人間以外の、神とか蛇にも考えが通じる。同時に幻聴、体感幻覚、有声考慮がある。

### Ⅲ) 妄想と同時にあるもの

妄想によつて自己への関係づけが行われるときには、外から示される意味と自己の心の内容とが触れあうならば、同時に思考察知感が存在しうる。自己への関係づけは感受性関係妄想から妄想知覚に至るまで、いろいろの妄想にありうるが、その何れにも思考伝播は共存しうる。

症例 23. 自分の勤務する銀行では、行員の平素の品行をやかましくいわれる。私は課長代理で部下の模範にならねばならぬ立場にあり、品行方正の方であつた。近頃魔がさしたのか、酒をのんで、はじめて特飲街に一人で遊びに行き、女を買つた。翌日銀行に出ると、皆の雰囲気を変つてゐる。皆がもう自分の昨夜のことを知つていて、こそこそ笑つたり、課長代理のくせにけしからんととがめられているように感じ、職場の雰囲気が今にも自分を尋問に呼び出しそうで、誰かの話の中に、3時と聞えると、3時に呼び出されるのかと思う。いたたまれなくなつて、課長の家へ辞表を出しに行くと、まだこちらが何も打ちあけない中に、奥さんがケーキにフォークをそえてすすめた。フォークでそんな不行跡な者は課長代理をやめて自殺した方がいいという意味を暗示していると思つた。

これは敏感関係妄想と共にある被察知感である。

症例 24. 自分の秘密が近所中に知られてしまつた。先日子供をつれて近所の歯医者に行つたら、先生が、お嬢さんはこのごろおしつこをしなくなつたかと聞いたので、はつとした。私には数年前まで夜尿症の持病があつたので、先生はそのことを違まわしに聞いたのだと思つた。こちらの病院に来て、患者や看護婦がそのことを知つてゐる。自分の方を、ああこの人がというような目でみたり、皮肉をいつたりする。

症例 25. 子供の頃近所の遊び仲間をそそのかして親に金をせびらせ、その金で買いぐいをした。近頃になつて、まわりの人が皆そのことを知つてゐる。目つきなどで、あやまれ、あやまれとか、警察へ行けとかいわれる。

以上2例は妄想知覚であるが、自分の恥じる過去の経験が人に察知されたものである。

症例 26. 自分の過去のまぢがい、人に知られ批判されるように思う。6年前マージャンの賭に、大した金額ではないが、会社の金をつかつた。そのことが近頃同僚の間に知れて噂され、とがめられる。面と向つていうのではなく遠まわしに、ごまかしたなどといわれる。自分のことのようにとれる。病院に入つてからは、隣の患者の所へ来た見舞客が自分の昔の女関係を知つていて、ほのめかす。女を作るなどと話す。以前会社の仕事である町にいた時、ある女と関係したことを知つてそのことをいつていると思う。しかしあとでしらべたら、その見舞客はその町の人ではないというので、自分の女関係を知つている筈はない。自分の思いすごしであつたかもしれないが、自分のあやまちを知られてしまうような気もする。

これも敏感関係妄想に近い、自己の劣等感に関係した、妄想知覚と思考察知である。

症例 27. 自分のことを誰にも知られない普通の人間になりたい。自分のことはどこへ行つても皆に知られている。皆がびつくりしたような顔をするので分る。自分の考えること、生れてから今日までのことがすつかり皆に知られる。バスや電車の中でも、まわりの人が自分の見ているものを見抜いているようにみえる。

これは特定の、感情的な内容でなく、すべての内容が人に通じてしまう形のものである。

症例 28. 私の考えるごとがすくに人に分つてしまふ。人に知られて困ることはないが、何を考えてもすくに周囲の人に読みとられてしまふ。周囲の人の顔にそう現れているというか、皆の顔を見るといきなりそう感ずる。自分の病室の人達が、何となく固いかつこうで話したりする。——私の方から他人の気持をスつと読みとることもできる。

これは妄想知覚による交互の思考察知である。

症例 29. 私のすること、考えること一切が他人に分つてしまふ。こうなつたのは一年位前からで、他人に分つているということは、これといつてはつきりした証拠はなく、むしろ皆わざと私のことを知らないようなふりをしているが、私には勘で分る。向うのちよつとした動作、気配のようなもので分る。私が今日はこの着物をきてこの帯をしめてと思うと、向うの人が、あつというように驚いたような動作をする。今先生と話していることも向うに分つている。分つても別にこまらないが、誰かの所へ金を借りに行こうとか、夫婦の内緒話などが分ると都合がわるい。

他人の考えも私に分る。今あの人は何をやらうとしているのか、向うがやらないうちにすくに分る。向う

のちよつとした動作で分る。すると向うの人がいやな顔をする。人が躍つているのをみると次はどう躍るのか分つて、こちらもつられて手が出そうになる。

これは妄想知覚と共にあるものと、純粋な思考伝播との両方が一人の患者にみられるものである。

症例 30. 私のことはすつかり人に分つてしまふ。自分の考え、姿が人に知られる。自分には考えが声になつて聞えたり、影が見えたりすることはないが、人には声となつて聞えたり、影となつて見えたりするらしい。近所の人に会うと皆が、ウウ……というような態度をするのでわかる。

これも妄想知覚と共に思考察知があるが、思考の伝播は他人には声や形となつて伝わりと感ずる。

症例 31. 自分のことを知らぬ筈の人が、自分のことを知つていて、ほのめかしたり、あてつけたりする。以前大学の試験に落ちて一年浪人したことなど洗い出して、教室の助手が笑いものにす。あいつは数学が好きだといつているが、実は数学で落ちた、などと話しているが、自分のことをほのめかしているのだ。またある友人の前で自作の詩を読んだり、ジュリアン・ソレルのことを話すと、すぐに他の連中に伝わつて、あいつの詩は甘いか、ジュリアン・ソレルとか話しあつている。誰かと話していても、こちらは少ししか話さないのに、相手がこちらの考えを早く分りすぎる。向うから先にほのめかして、いいあててくる。

症例 32. 自分のやつていること、考えていることは皆に分つてしまふ。それは皆の態度、話の内容から分る。英語の予習の時、are という動詞をしらべてゆくと、翌日教室で皆が、are なんて語は知らないよと、ばかにしたような調子で話している。前日の自分のことが知られて皮肉られる。また景色をみていゝなあと思うと、そばの人が肯定をするようにうなずくしぐさをする。病室の日記を書こうかどうしようかと迷つていると、看護婦さんがもう寝なさいという。同室の患者さん達も、こちらの考えを導いたり、ヒントになるような動作をしたり、いびき声をたてたりする。また夜眠れない眠れないと思つていると、翌朝皆が、眠れない眠れないというのは神経のせいだと、あてつけるように話しあふ。どこにいても自分の考えを知られるので、身のおきどころがない。飛行機の音がすると、飛行機の人からも自分が監視され、見すかされるのを感じる。

この例では、批判や指導や示唆などの意味がみえとられると共に、思考伝播がある。

症例 33. 自分の心は人間だけでなく、飼つている

犬にも通じる。自分の心がせつない時、飼っている犬もせつなそうにして、そんな弱い心ではだめだ、しつかりしろというようなかつこうをする。

これは妄想知覚とも思えるが、感情移入の激しい場合には普通の人にも感じられるようなものである。

症例 34. 自分の考えることは皆に通じる。人の表情でそう感ずる。また自分が何か悪いことを考えると、鶺鴒が自分をばかにするように鳴いたり、蝶々がひらひら舞つたりする。この頃犬が鳴かなくなつたと思つと、犬が鳴く。これも考えが通じたのだ。

#### IV) 種々の症状と共にあるもの

作為体験、幻覚、妄想などのうち、二種以上のものが同一例にみられるものがある。それらは同時にあるものもあり、経過の中に一つのものから他に移るものもある。

症例 35. 工場の仲間と二人で箱根に遊びに行き、地獄谷の途中で便所に入つたら、急に手淫がしたくなつたのでやつた。便所から出てくると、様子が変で、皆が自分の手淫のことを知つて、じろじろ自分の方をみているように感じた。帰りのバスの中でも、電車の中でも、皆がそれについてささやき合つているようで、はつきりと自分の名を出さず、言葉の端でそれとなくいう。その後で新聞やラジオでも自分のことをいう。その中に、近所の医者の子の女中にあとをつけられるようになった。姿はみたことがないが、どこへいつてもその女の声でいろいろいつてくる。箱根の山の中のことが相手に分つて、手淫をしたから性的にだめになつたとか、私と一緒になれという。自分には東京に許婚がいるので、そんな女と一緒にするつもりはないが、もう一人の自分が腹の中で惚れているというようなことをいつてしまい、それが向うに通じて、向うからまたいろいろいつてくる。腹の中の声は腹話術のようなもので、自分では喋るまいとしても思わず出てしまい。それが近所の人や東京にいる許婚にまで通じ、向うから答えてくる。

この例では敏感関係妄想にはじまり、幻覚、対話の声となり、同時に思考伝播も訴えられる。

症例 36. 私以外の誰も知らない筈のこと、私の考えや、日記や、学校時代の成績など、村の人や友人の声で言葉にして送ってくる。日記など、わざわざ読みあげたり、何か読もう、書こうとすると向うから声でやじるので分からなくなつてしまう。レーダーのような器機で心の中を探つていると思つ。

この病院に入つてから、この病院の人たちと村の人とは何か連絡があると思えない。他の患者さんや看護婦さんまで私のことを思つている。私のことで皮

肉をいつたり、こちらの心を動作でやじつたりする。隣のGさんのことを悪く思うと、それが通じてGさんが咳をする。

この例でははじめ幻覚、のち妄想と共に思考伝播がみられる。

症例 37. 僕の頭の中は何もかもさらけ出されている。あらゆる人に知られている。先生にも通じている。先生をためすために、こちらが胸の中であることを考えたら、先生はうんうんとうなづくような格好をした。特に心に悪いことが浮ぶと、周囲の人に分つてしまつてきまりが悪い。バスの中で、今夜一杯飲もうかと思つと、他の乗客が苦笑する。パチンコをやつて、玉がどんどん出ている時に何かよくないことを考えると、急に玉を出なくされる。

一人でものを考えている時、その考えを他人が読みあげてくる。自分は何も文字を書かないのに、3、4人の人の声でわいわいと読むので、自分の考えを盗まれたようで、腹が立つ、またその声は、自分の考えに合ずちをうつたり、反駁したりしてくるので、抗議しようとして外に出てみるが、人影がない。

考えたことを自分で口に出していつてしまうので他人に聞かれる。自分は発声するつもりはないが、ひとりてに声になり、向うから来る人が、耳をすますような様子をしたり、咳ばらいをしたり、驚いたようにさつと歩き方をかえたりする。

自分の考えが他人に分るといふことは、他人の話を聞いていると、その中でたえず自分の考えをいわれるので、向うに分つたと思つ。しかし本当は自分の心の中で考えるのではなくて、声に出していつて、それが聞えるのかもしれない。

自分の考えだけではなく、自分の目に入つたものまで人に分つてしまう。緑の木を眺めると、それが自分を通してテレビのように外に映つて他人にみえる。映画館に入ると、前の人たちは自分のみている映画をふりかえつてみる。自分の体は人間テレビといふか、機械のようなものになつてしまつた。自分のことだけが人に分つて、他人のことは自分には分らない。

この例では妄想や幻覚や、対話の形の幻覚や、運動性言語知覚などいろいろのものと同時に思考伝播がある。

症例 38. 心の中で思つたことが、隣近所に知れて困る。自分は分裂病で精神病院に入つていたと思つと、それが両隣の家に分るらしく、咳ばらいしたり、雨戸をびしやりと閉めたりする。

私が声を出さずに本を読んでいると、それが隣家の子供に分るらしく、その通りにまねして読んでく

る。また私が台所でお鍋がこげたと思うと、隣家から大声で、お鍋がこげたといつてくる。

私が瞬間的にふと思つたことが声になつて隣家に伝わつてしまう。はじめは声が聞えるのか、自分がいつているのかわらなかつたが、やつと自分がいつていることが分つた。わいせつな言葉がふと心に浮かぶと、肩のへんで声になる。それは普段話す声とはちがつてとてもかんだかい声なので、すぐに他人にも聞えてしまう。

前のように自分で喋る声が聞えてしまうということではなくなつたが、私の心はやはり他人に通じてしまう。病院の待合室で雑誌を読んでいると、こちらは声を出して読まないのに、隣に坐つている人がいかにもうるさそうに咳ばらいをする。また私が室に入つてくると、まわりの人がくすくす笑つたり、わいせつな言葉をいつたりする。それで自分では知らずにまたわいせつなことを喋つてしまつたのかなと思う。

他人の考えることがこちらに分ることもある。バスの中などで前に坐つている人の考えが分る。自分がその人と同一人物になつてしまつたような感じになる。

この例では知覚、妄想、他人との交流、他人との同一化などいろいろの現象と共に、思考伝播がある。

症例 39. 人と話している時、急に話を続けることができなくなる。そしてこちらの考えが向うに分つているというそぶりになつて相手にあらわれる。話ができなくなるのは、話そうとすることが分つて相手にじやまされるという感じである。

これは妄想知覚と作為とに結びついている思考伝播である。

症例 40. 心の中で無言で考えたことが人に分つてしまう。遠くの方から誰かの声が聞える。買物にでかけようかおしようかと考えていると、よした方がいいという事と、行つた方がいいという声と聞え、自分が動こうとしないのにひとりりで体を動かされて出たしまつた。

これは幻聴と作為と同時にある思考伝播である。

症例 41. 自分のしていることが人に通じてしまう。朝洗顔する時、水を汲もうとすると、眼の前にひよいと他人の顔が浮かんで、水を何杯汲まなければいけない、四杯だと死に通じて縁起が悪いから四杯でないよおにといわれる。そうさせられる。考でいうのか、そうさせるのかわからない。自分のすることは箸の上げおろしまで分るらしく、世話をやかれる。

これは知覚と作為と思考伝播が共にあるものである。

症例 42. 近所の S という男が自分の頭の中を読み

とつて操つている。頭の判面が死んでしまつて、S がそこに入りこんで、こちらの考えを探り、考えに返事したり、指図したりする声が聞える。本を読んでいるも、急に先を洗めなくさせたり、計算の途中で頭をにぶらせたり。右を向け、左を向けと命じて来たり、向うのいうことに返事をさせられる。

この例では幻聴と作為や体感知覚と共に思考被察知がある。

症例 43. 3 年前から私の頭が左右二つに分裂してしまい、半分は自分だが、半分は麻痺したようで感覚がなく、その中にまわりの人が入つて私の考えや行動がまわりの人に直通してしまう。こんなばかなことはないと思つても、どうしてもそれから逃れられない。自分でああしたい、おおしたいと思つても、片方の頭でそおでないよおにさせられる。町の中でも乗物の中でも、まわりの人の身ぶり、態度が私の考えや起居動作と一致している。こちらの考えにヒントをよこしたり、同情したり、悪くいつたりする。ラジオや新聞も私の心の内容にふれている。私が他人の家に行くと、向うで私の来るのが分つていて、あつというよおな、びつくりしたような顔をされる。胃腸のぐあいが悪くて御飯をたべないでいると、人が親切にうどんを持ってきてくれたり、お茶がのみたいと思うと、お茶を持ってきてくれたりするの、都合のよいこともある。まわりに人がいなくても、こちらの思つた人に心が通じて返事してくる。片方の頭で私が話すと、半分の頭の中で私の思つた人の声が聞え、いいとか、悪いとか返事してくる。先生のことを思うと先生の声になる。吉田首相や植原悦次郎の声も聞いた。こんなふうに自分の頭が他人と直通しているのは、アメリカかどこかで私を実験台にして、スパイの研究をしているせいだと思ふ。他人の考えもこちらが予言するように分ることがある。

この例では知覚、妄想、作為と、他人の考えも自分に分り、また誤再認 *fausse reconnaissance* も同時にある思考伝播である。

#### V) 誤再認 *fausse reconnaissance* と共にあるもの

症例 44. 10 日程前から自分と妻との間で精神的に伝わりあうようになった。自分の考えたことはすぐに妻に伝わる。妻のことを性的に興奮してくれと頭に描き出すと、妻に通じてその通りにしてくれる。妻の感じたこともすぐこちらに通ずる。妻の実家に家庭争議があつてもめたということなどすぐに分つた。

この例は殆ど純粹の思考察知であるが、相互の察知であり、又同時に誤再認もある。

症例 45. 自分の考えたことがすぐに新聞社、ラジオ、文壇、映画人に通ずる。不思議な現象だが、これは本当の実感である。朝日新聞の天声人語に自分の考えた通りの記事が出たり、ラジオののど自慢の放送では、自分が審査員になつていて、これはいいと思うと、鐘が三つなる。また谷崎潤一郎の鍵という小説の假名づかいは、前から自分の考えていたことで、それが向うに通じたのである。またフランスのルネ・クレールがジェラルド・フィリップを使つて、夜の騎士道という映画を作る。自分はこの監督と俳優が好きで、前から二人を組ませたらいいと思つていたので、それで通じたのである。自分の考えがこのように通じるのは、放射能のせいではないかと思う。

これも誤再認と共にあるものであるが、純粹の思考伝播とも考えられる。

症例 46. 自分の心が周囲の人に見すかされる。活花をしていると、芯がまがついているとか、ばらばらだとか、師匠にいわれる。それはちょうどその時の私の心の状態を指している。こちらの心が通じて都合のよいこともある。こんな風景がいいなあと心に描いた場面とそっくり同じ写真を友達に写して持ってきてくれたり、ある友達をなつかしく思つているとちやんと向うから訪ねてきてくれる。雑誌の記事などが自分の過去にふれていることもある。同性愛のことが出ている。昔女友達と同性愛のようなことしたのを知つてあてつけている。

他人のこともこちらに分る。相手の話そうとすることが先に分つてしまひそうになる。また向うから来る人が、ああ右に曲るなと思つていると、右に曲る。

症例 47. 自分の考えや知恵が他人に盗まれて分つてしまふ。口に出さないで、心の中で考えていることを、傍の人が先に盗つて、同じ意味のことをいつたり、こちらの考えを使つているのをみる。湯を汲みに行こうと思つていると、他人が先に汲みに行く。こうしようと思つている矢先、隣の人がそれをじやまするような行為をする。

症例 48. 自分の考えや、自分の生いたちが、新聞や映画に盗用される。某新聞の一面に私の意見をそのまま出したり、若き日の千葉周作という映画の題材に自分の生いたちを利用したりする。

これらの例も誤再認と共にあるが、これらは何れも、他のものどくらべれば、純粹な思考伝播であると思われる。

### 3. 考 察

思考伝播の現象は以前から知られている。Wernicke は、とつにご存じのくせに——das wissen Sie ja

schon——とか、ご自分がずつとよくご存知の筈だ——das wissen Sie selbst viel besser——などというのを、思考伝播とはいわないが、自生観念 autochthone Idee に対する説明妄想として、相手がこの考えを考えだした人であるとして、その故に相手はその考えをよく知つている筈だとすると説明した。Kraepelin の記述によると、患者の心は開いていると感じ、全世界に分つてしまふと思ひ、誰もが勝手に患者の心を読みとり、盗み聞きされるといい、他人が患者を見透すという。Gruhle になると次のように叙述している。即ち、患者は自分の考えが彼だけに属しているのではなく、他人がその分前にあずかつており、のみならず町中がそのことを知つている。このような確信はいふまでもなくいろいろの道程から作られる。妄想患者は人々の態度で自分の心が知られていると思ひ、幻覚患者が聞える声の内容から、このことは皆が知つていると思ふのは、自我麻痺ではないが、分裂病患者が、声を聞くことなしに、自分の考えが町中に知れて「感ずる」のは、この思考過程自体に質的变化があるのだとする。そしてこの思考は患者だけではなく、患者から疎外され、患者の自我は半分しか関与してないのであり、これは一種の自我麻痺であるとする。

Schneider は一層くわしく述べている。考えが自分一人だけのものでなく、他人がそれに関与し、町中、世界中に知れてしまつていくと訴える。この思考内容に他人が直接関与する、他人が患者の分け前を持つていくという症状を、思考所有權の剝奪又は思考伝播と名づけたい。これは必ずしもすぐつかめるとは限らない。それを知らせる声が開えるのともちがうし、又、妄想患者が他人のちよつとしたしくさや、言葉の端から、自分自身の考えたこと分つてしまふと確信する妄想知覚というのでもなく、又、知覚を基礎とせず、これと同じ内容が思いつかれる妄想着想ともことなる。これはむしろ思考過程自体の、それ以上何とも述べることのできない、質的变化としかいえない(Gruhle)。ある分裂病の女性は思考伝播を次のようにいつている。——「私の考えることは人に分つてしまひます。おかくしになつてもだめですよ。そうなんです。私はすぐそうと感づきます。顔つきで分ります。悪口のような、けしからぬことを考えるのでなければ、分つたつてそう困りません。私が何か考えると、向い側の人にすぐそれが分るのですから恥かしい」、「一緒にいる患者さんたちが皆迷惑していますから、これ以上病院にいられません。私は何もいわなくても、私の考えたことは皆に分つてしまふのです。こ

のことは患者さんたちがびつくりしたような顔をした  
り、看護婦さんが驚いたように頭を振つたりするの  
をみれば分ります。こんなことが一体あるのかと驚い  
ているのです。先生だつて私の考えがすつかりお分り  
です。一度試してみませんか。私はだまつています  
から、じつとお聞きになつてごらん下さい」。この  
場合、他人の態度から知られるというために、妄想  
知覚と考えることもできようが、やはりこれは原  
素的な思考伝播であつて、思考過程そのものの障  
害であることは、まず疑いがない。ある患者は「2  
〜3年前から私の考えることが父親に盗み聞きさ  
れ、私の考えを本当に盗つてしまつたのです」と  
訴えた。かように思考伝播と思考奪取と結合する  
ことから、やはり思考伝播が思考奪取と同一要素  
の体験であることが推定される。以上のように  
Schneider は論じている。

私は約50例の思考伝播のある患者を集めてみた。  
そして純粹の思考伝播だけあるというものはなく、  
幻聴や、作為や、妄想や、誤再認といつても結合  
してあらわれていることを見た。また幻聴や妄想  
知覚に伴ついても、必ずしも幻聴や妄想知覚が一  
次的な体験であつて、それから導かれる如く、す  
なわちその原発体験の説明として、思考伝播が訴  
えられるとは限らず、患者のいうところを正直  
にとれば、幻聴や妄想知覚などがあると同時に  
思考伝播もあるとしかいえない例が多いことを見  
出した。これは何故であろうか。

話をせず、また表情を見ずに、人間が相互に  
相手の心を知るということは、健康者においては  
あり得ないように思われるが、人間は生物、い  
な無生物に対しても、何の言語や表情の媒介  
なしにも、こちらの気持は相手に分り、相手の  
気持はこちらに分ると、僅かながら、おぼろ  
げに感ずるものである。これは相互の感情移  
入ということもできよう。人間はある人間に出  
会ふと、話をし、表情を眺み表わす以前に、自  
分の気持は相手に通じ、相手の気持は自分に  
分ると思ふものである。これは理性的にはあり  
えないものであつて、原始的な交通であるが、  
人間同志の交通の底にはこのような非理性的な  
ものが深く横たわつてゐるものである。我々は  
動物に相對する時に、このような原始的な交  
りによつて、相互の精神的なものがいかに豊  
富にされるかということ、ひしひしと感ずる。  
このような非理性的、非合理的な交通はしか  
し、我々の意識にはつきりとあらわれてゐる  
ものではなく、意識の背景にあつてほのかに  
感じられるものである。

意識を前景意識と背景意識とに分つて、  
分裂病においては前景意識と背景意識の分化が  
不完全になり、前景意識が稀薄になると共に  
背景意識がきわだつという

ように意識の場における分化の変化がある  
ということから、分裂病の諸病的体験を眺める  
ことができることを、西丸がいつている。彼によ  
ると、幻覚にしても、作為現象にしても、妄想  
知覚にしても、我々正常者において、意識の  
辺縁に、背景としてぼくぜんとあるものが、  
強い明瞭性をもつて前景におし出してくるもの  
と見ることができる。

今ここで取扱つてゐる思考伝播も、正常  
人における背景的な原始的な交通の前景化、  
明瞭化、具体化と見るときには、幻聴や妄想  
知覚や作為現象と同列におくことができる。  
これらは何れも前景背景形成の障  
害とみることができるので、分裂病の際には  
これら種々のものは同時におこりうる可能性  
を持つてゐる。背景的な原始的な交通の  
前景化の場合には、患者と相手との交通の  
能動的な部分、すなわち患者から相手への  
往路は思考伝播となり、受動的な部分、す  
なわち相手から患者への復路は、あるいは  
幻聴となり、あるいは作為となりあるいは  
妄想知覚の意味となり、あるいは誤再認  
となるのである。従つて思考伝播はそれより  
上位にある原始的な交通の障害であり、それ  
は前景背景形成の障害によるものとみ  
なすことができるのである。そして思考伝  
播には必ず幻聴や妄想知覚などが共存する  
のが当然なのである。

#### 4. 要 約

約50例の思考伝播の分裂病患者の観察  
から、これらにおいては幻聴 作為現象、  
妄想知覚、誤再認と共に思考伝播が共存  
することを見、純粹の思考伝播は存在  
しないものであることを見た。その理由  
として、思考伝播は幻聴、妄想知覚など  
から説明されるべきものとは限らず、  
思考伝播は人間と人間の間の原始的な  
交通の障害であり、背景的な原始的な  
交通の前景化の一節であり、その場合  
もう一節として幻聴や妄想知覚——  
これもやはり前景背景形成の障害であ  
る——が必ず存在しなければならない  
ことを明らかにした。

(本論文の作成に当り、御懇篤な御指導  
を頂いた西丸教授に心から感謝いた  
します。)

#### 文 献

- ①Wernicke: Psychiatrie 1906. ②Kraepelin: Psychiatrie 1903 7 Aufl., 1913 8 Aufl. ③Grubler: Psychologie des Abnormen 1922. ④Schneider, K.: Klinische Psychopathologie 1955 4 Aufl. ⑤Schulhof: Praktische Psychiatrie 1949 2 Aufl. ⑥村上: 精神分裂病の心理, 昭和32年. ⑦西丸: 分裂性体験の研究, 精神誌 60, 昭和33年. ⑧西丸: ダーザインとゲンタルト, 精神医学 1, 昭和34年. ⑨小尾: 61巻1号, 昭和34年.